
神と人と、獣と。

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神と人と、獣と。

【Nコード】

N0721Z

【作者名】

凜

【あらすじ】

1000年後の世界。獣と人が争う世界で、獣として生きるヒトがいた。

異世界召還ものです。生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

初です！。

プロローグ

世界を造った神様は、人間が嫌いでした。人間は神様の造ったモノを次々と壊して、人間以外の生き物はたくさん死にました。

神様は泣きました。長い間ずっとずっと、泣きました。それでも、人間が変わることはなかったのです。

神様は思いました。人間達に、気づかせなければ。

自分たちの咎を。

□

□

□

まだ西暦、といものがあつたころから数えて1000年。天変地異か神の怒りか、1つだった世界の大陸が2つに割れた。人間以外のすべての生き物が信じられない速度で進化を遂げ始め、獣は言葉を

操り、科学では証明できない力を使った。獣が都市や町を蹂躪し、植物の進化によって食料が得られなくなり、人間の人口は急激に減っていった。

しかし、それでも人間は滅びはしなかった。

残り少ない技術を駆使して獣を殺し、俗に「魔術」と呼ばれるそれを手にした。そして人間の知恵をもって獣以上の「魔術」の力を手にし、奪われかけていた「片割れの大陸」を取り戻した。

□

□

□

神様はまた泣きました。

人間達はまた、同じことを繰り返そうとしている。また、壊されてしまう。嫌だった。絶対にいやだった。人間にも生きていてほしいのに、人間は他が栄えるのを良しとしない。人間を止められるのは一体なんだろう。考えて考えて考えて――。

神様が出した答えは、人間だった。

プロローグ（後書き）

プロローグです。

始まりの日。(前書き)

主人公が出来ます

始まりの日。

夜の12時ごろ。なぜか全然眠れなくて外に散歩にでた。ド田舎であるここでは女1人で歩いててもまったく心配ない。

歩きながらぼーっと空を見上げていると、不意に霧が出てきた。さっきまで完全に晴れ渡っていたのに、おかしい。行っても戻っても、進んでいるのかすらわからない。

「なんなのよ・・・これ」

どうしようもなく突っ立っていると、突然強い風が吹いて、霧が晴れた。

「・・・・・・・・。」

見渡すと、半端じゃなく深い森だった。いくらド田舎でも、これはありえない。少なくとも近くにはなかったはず――、ぐるぐる

と混乱していると、目の前に綺麗な女の人出现在了。

びっくりして口が塞がらないでいると、女の人がしゃべり始めた。

「よく来てくれました。咎を持たぬ人の子よ」

「咎・・・？」

「無垢で罪など欠片もないあなたに、私の世界を救ってほしいのです」

ますます意味不明だ。世界を救う？この女の人？どういうことだろう・・・。

「あなたは誰ですか？あと、世界とかって言うのもよくわかんないし・・・」

女の方は、今にも泣きそうな顔をして、答えた。

「私はこの世界を造った――、そうですね、神のようなものです。あなたは私がこっちの世界に召還しました。あなたに、獣と人の争いを止めてほしいのです」

「召還・・・？」

「召還の魔術はあなたが死ぬことで解けます。こちらでどれだけ過ごしても、死んでしまえば同じ時間の向こうに帰ることができます」

帰れる。しかも同じ状態で。

「私にできることなら・・・やってみます」

安心して安請け合いしてしまった自分をどれだけ後悔するか。このときはまだ、何も知らなかったのだ。

人でも獣でもない者。 (前書き)

獣さんとうご対面ですゝ

人でも獣でもない者。

「本当にありがとう。では、早速行ってきてくださいね」

「え？まだ聞いてないこととか——」

「ある程度のものは差し上げますので。ご武運を祈ってますー」

神様？がひらひらと手を振るとまた霧が出てきて、あっという間に見えなくなってしまった。まさか・・・このまま放り出されるのか。

また強い風が吹いて、元の森に戻ったけれど、そこに神様はいなかった。何故か私が手に持っている緋色の着物？は神様が言っていた「ある程度のもの」のようだ。それに、なんだか体がおかしい気がする。とりあえずもらった着物を着て——。膝上丈だった。この世界の服とかがどんなものか分からないし、脱ぐわけにもいかないんだけど。

ふっかふかの草の上を裸足で歩く。前の世界じゃこんなのやったことなかったなーと、またぼーっとしながら空を見ていると、

「・・・っ！人間だ！」

ん？人間って私のことだろうか・・・？てか人間だ！とか人は言わないはず。てことは・・・

「・・・獣？」

真横の茂みがびっくりしたようにがさつと揺れた。神様に獣と人の争いを止めて、といわれたのだから、人間を止めてほしい、ということだろう。つまりは獣さんとは仲良くならないといけないわけで。

「えーっと、何にもしないから出てきてくれないかな？」

「・・・人間、ここに何のようだ」

さっきの声とは違って低い女の人らしきの声が帰ってきた。

「用、といわれれば・・・仲良くなりたいと言うか・・・？」

途端に殺気みたいなざわざわした空気が私に向けられた。これは完全に疑われちゃってる・・・。

「人間がよく使う汚い手だ。油断させて近づき、取り入ってから殺すのだ」

「っ！ちが——」

否定などする暇もなく、茂みから私の体の2倍ぐらいある狼が飛び掛ってきた。

「うわあっ!?!」

食べられる!と思ったはずなのに、体が自然と動いて飛び退った。

「・・・ほう?」

額から汗がつーっと落ちてったのが分かる。やばいです!これは完全に殺される方向で――――
狼さんがまた飛び掛ってくる。それを紙一重でまたよける。

「だから仲良くなりたいだけで何もしませんってば!」

それでも狼さんはまったく聞いてないようで、止まない攻撃も、何故避けられているのか分からないし怖すぎる!というわけで一か八か、狼さんが飛んでくる瞬間を見切って――――今!

「……なっ」

「おお……できた！」

狼さんをキャッチしてみた。それにしても近いと綺麗な目だなー、でも顔がめっちゃくちゃ怖いです。狼さん。するとふう、とあきれた様に息を吐いてから、私の顔に狼さんが肉球をのせた。やばい、ぷにぷにすぎて気持ちよすぎる……！

「本当に攻撃はしてこないのだな……。武器も持っておらんようだし……」

「だから最初から——」

「ヴォル、出てきてよいぞ」

ヴォル？ヴォルって誰だろう？と考えていると、さっきの茂みから小さな狼がでてきた。こっちの狼さんとおんなじの、綺麗な銀色の毛並みだった。

「お母さん・・・？」

小さな狼が不安そうにこっちを見ている。

「大丈夫だ。こいつが王が言っていた人でも獣でもない者だろう」

「人でも獣でもない者？」

「お前が、神が争いを止めるために連れて来た咎のない人間だろう？」

そういえば・・・無垢で罪のない、とか言われたような。神様はきっと人間を止める人間がほしかったんだろうと勝手に解釈してるけど。

「うん・・・たぶんそうだと思う」

一瞬目を伏せてから、狼さんが歩き出した。

「ついて来い。王の所へ案内する」

こうして殺されかけたりしながらも、王様に会えることになったのでした。

人でも獣でもない者。(後書き)

次回王様とご対面です)

王との対面。(前書き)

王様登場です)

王との対面。

森の中は木漏れ日が降り注いでいて、すごく心地いい場所だった。ド田舎だったからある程度は慣れているんだけど。

「お前、名はなんという」

「え？　っと、燐です」

「そうか、私はラル、この子は息子のヴォルだ」

ラルの後ろをひよこひよこ歩いてきたヴォルが、こっちをむいてぺこっとお辞儀をした。やばい。もふもふしたい可愛い。犬とか猫とか大好きなのだ。狼も犬と似てるしきつともふもふしたら気持ちいいだろうな・・・

そんな幸せ回路に入っていると、大きな洞窟の入り口に着いた。王様って言われたからってつきりお城だと思っていたので、なんか変な感じだ。

「王様ってどんな感じ？」

するとラルは少し悲しそうな顔で答えた。

「王は今病に臥せておられる。今のところ打つ手が無くてな・・・
悪くなる一方なのだ」

「そう・・・なんだ。じゃあこんなときに押しかけちゃだめなんじゃ――――」

「いや。王は咎無き人を心待ちにしておられた。なんとしてでも会ってほしい」

洞窟を進んでいくと、地面が大きく窪んでいて、窪み全体が鳥の巣みたいになっていた。

「王、咎無き人を連れて参りました」

そして顔を出したのは―――、

「やっと来たか……」

巨大な、竜だった。

「う、わぁ……すごい……!」

「会えて嬉しいぞ咎無き人よ」

竜……もとい王様は、金色の角を2本生やした、紺碧の巨大な竜だった。綺麗で、病のせいか儚くも見えた。ぼけーっと眺めていると、王様が巢に手をかけて身を乗り出してきた。

「うわ・・・っと？」

「神からある程度は聞いている。人間を止められるのは人間だけだと、神は言っていた」

「はい・・・。でも、なにをすればいいのかさっぱりで・・・」

王様はすつと身を引くと苦しそうに体を丸めて、顔だけをこっちに向けた。

「人を止める以上、戦うことは覚悟しなければならん。すまないが・・・後のことはラルに聞いてくれ。体調があまり・・・優れない。」

「・・・わかりました。王様の病のことも、私なりにがんばって探してみますね」

王様はふっと笑うと、何かを啜えてこっちになげた。

「私の涙で作らせた物だ。それをやるから持っておけ」

そういつて眠ってしまったようだった。王様がくれたのは、雫の形をした綺麗な石だった。

お礼を言って洞窟を出ると、外でラルが待っていた。中でのことを話して石を見せると、少し驚いた顔をされた。

「そうか……。王がお前にそれをな……。必ず身に付けておけ。」

「んー、このままだと落とすちゃうと思うんだけど……」

「そうだな、色々そろえる物もあるし、ついでに何かに加工してもらえばいい。知り合いに武器を取り扱っている者がいるから、そこに連れて行ってやろう」

「武器……」

王様に言われた「戦い」という言葉に不安を覚えながらも、前を歩
くラルに、ヴォルと一緒にいくのだった。

魂の武器。(前書き)

初の感想をいただきました・・・。

泣いて喜んでいます(´・ω・｀)

魂の武器。

ラルに連れられてたどり着いた場所は、以外にも普通の小屋だった。

「ゼク！いるか？」

「あー？ラルか？ちょっと待てよー」

中から間延びした声が聞こえてきて、ドアが開いた。中から出てきたのは――――、

「よお、ラル。なんだ、お前が人というのは珍しいな」

「え……人間！？」

人間のおじさんだった。

「変なやつだな・・・お前も人間じゃねえか」

指差して口をパクパクさせていると呆れながら笑われた。

「だって人間ってものっすごく嫌われてるんじゃない・・・？」

「自分たちが間違っている、と考え獣と共に生きる人間もちゃんといる。まあごく少数だがな」

とラルが教えてくれた。こんな人たちでも、「咎」を背負っているのだろうか。こんな人たちがいてくれるなら、私は必要ない気がする。

考え込んでいる間に話が進んでいたようで、武器の説明が始まった。

「あー、一応武器屋をやっちゃいるが、実際につくるわけじゃねえ。

」

「え？作らないでどうやって・・・」

んー、と唸ってからゼクさんは小屋から大きな剣を出してきた。

「人間ってのはな、1人1人、魂を持ってる。その魂を武器に変えて戦うんだ。俺の魂の武器は、この大剣だ」

私の大きさを軽く超えてしまっている大剣をそっと触ってみると、なぜだか不思議な感じがして髪が逆立ったようにざわざわした。

「お、いい感じだな。ほんの少しだが魂の共鳴が起きてる。その感覚を忘れないよ」

「はい・・・？」

その後も説明を聞いていくと、どうやら魂を武器に変えられるのは人間だけらしい。獣は爪や牙があるからな、とラルが言っていた。魂そのものである武器は一度出すと戻せないし、完全に壊れると持ち主は死んでしまう。その代わり、通常の武器とは比べ物にならないくらい力が出る、ということらしい。

話が最後の方になったところで、ゼクさんが真面目な顔になって、聞いてきた。

「最後に聞いとくが、ほんとにいいんだな？武器に変えちまったら、もう二度と元には戻せねえぞ」

「・・・はい。神様とも約束しましたから」

ゼクさんはなんとなく納得いかないような顔をしていたが、私はそう返事をした。

このとき心のどこかで思っていたのだ。死んでしまえば帰れるのだから、と。

魂の武器。(後書き)

訂正が入りまくってますが、誤字訂正のみです。
(・ω・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721z/>

神と人と、獣と。

2011年12月3日19時07分発行